ア イシャ カンラス フィリピン出身の元カトリック

:

明:フィリピンからサウジアラビアへの旅。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: ア イシャ カンラス

日01 Apr 2013

集日 18 Aug 2013

私の名前はア イシャ カンラスといいます。ここサウジアラビア王国の首都リヤドに来る前は、 同 に私もカトリック教徒でした。

私たち家族は神へ祈りを捧げるために色々な教会へ行きました。そこには人の手によって作られた 像としての神が られていましたが、私は当 、それが本当の神の なのか疑に思っていました。彼らは神を たこともないはずなのに、なぜ神の容姿を知ることが出来たのだろうか、と。

フィリピンのマニラには、モスクのある地域があります。礼 の 刻にアザ ンが り くと、それが何を意味しているか分からなかったにも わらず、私は目を じて やかな 持ちに浸っていました。私にとって、それは心地のよい音 のようなものでした。

私自身はもちろん、 一人として私が将来イスラ ムに改宗するなどとは思いもよらなかったはずです。私は家族の将来のため、サウジアラビアに出稼ぎに行くことにしました。

カルチャ ショックに打ちひしがれないよう、私は事前に中 の国での生活に役立つことについて しました。

私は文化や国全体のこと、言 、そしてもちろん宗教について べました。私はすでに出前から、イスラ ムについて非常に 心を持ち、色々と み始めていました。

私の改宗はすんなりと行ったわけではありません。私は医者たちにイスラ ムについてたびたび ねました。彼らはサウジアラビア生まれ育っていることから、イスラ ムについてより深い　があることを知っていました。

2008年の1月15日、私の　にマドラサ（イスラ ム学校）があることを知りました。そこのクラスに私は出席することにしました。2008年の1月17日に、私はル ムメイトで友人でもあるボ ン ムスリムと初めて出席しました。

新入生だったことと、ただ一人のキリスト教徒だったこともあり、私は一身に注目を集めました。先生がイスラ ム、クルア ン、そして 言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）について るのを、私はしっかりと に入れました。

それ以降、私はイスラ ムをよく理解し始めました。それから、私はフィリピンにいる母 に　し、カトリックからイスラ ムへの改宗の 可を求めました。

アルハムドゥリッラ （神に称 あれ）、母は反 しませんでした（父は前年の11月に他界していました）。彼女は私が改宗することにより、家族のことを忘れてしまうのではないかと危惧していましたが、私は彼女にイスラ ムが家族、特に母 を非常に敬うことを教えました。

2008年の1月24日、私は先生と生徒たちの前でシャハ ダを行いました。シャハ ダの言 を唱えている 、私の体からはある の が せられていました。そのときの感 を、言 で 明することは出来ません。

シャハ ダを唱えた 、私の心が重荷から解放されたような感 だったことは えています。私は遂に、探し求めていた内なる安らぎを 付け出したのです。イスラ ムのなかに生きることは、非常に なるものです。

私は同僚たちから、なぜイスラ ムに改宗したのか ねられました。私の答えは、神以外に崇 に するものはなく、 言者ムハンマドは神の使徒の一人であることを信じるからだ、というものでした。

一部のキリスト教徒たちは、私が信仰を 切ったのだと なしました。しかし、私はそれが正しくはないことを 信しています。アルハムドゥリッラ （神に えあれ）、私はウムラも しました。2008年の3月5日、私はウムラを行いましたが、それは に残る特 なものでした。

そこでは、私はあたかもすべての 、 みや から分け隔てられたかのようでした。私は 喜しており、神の人 への恩 に して 美しつつ、そこに永久に留まることも出来ると感じたほどでした。

私はカアバ神殿を に ることが出来るなんて にも思っていませんでした。子供のとき、それを写真で たことはありますが、 にその前に立ったことで私は喜びで たされ、感 の念で一杯になりました。

私は 末に、 のマドラサに通っています。 の と共に、イスラ ムについてより多くのことを学んでいます。私は自分の信仰が神と共にあり、それが 化されていく限り、万事 にむであろうと感じています。

私は自分の家族も同 に、イスラ ムを受け入れられるように 得出来る日が来ることを神に祈っています。私は彼らが 判の日の から救 されて欲しいのです。

善良な人生を送り、模 的であることがムスリムにとっての最善の行いであると私は思っています。それによって非ムスリムは 味を抱き、イスラ ムに する否定的な 解が いであることに 付くからです。

私はムスリムの夫を持つ、とても献身的なキリスト教徒でした。私は彼の性格に惹かれて 婚を 意しましたが、ムスリムとしての彼ほどイエス キリストの教えを 践するキリスト教徒を知らなかったからです。

しかし、私は彼が　った道を んでいることを 明し、キリスト教に改宗させようともくろんでいました。彼は私の信仰に 容で、「キリストは　のどこで彼自身が神であることを教えているのかい? 」といったような、私の信仰について重要な疑 を投げかけることが常でした。

　にはそのような 所がないことが分かると、私は 心に べ始めました。しかし 果としてはがたまるばかりでした。そこで私は、夫との　出来るよう、 クルア ンの英　を み始めたのです（皮肉にも、それは牧 から り受けたものでした）。

私はそれが　の教えと　していることを 出しました。私は唯一なる神の概念に安らぎを えました。神に えあれ、私たちはムスリム家族となったのです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/1732

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。